

「ベルリン国際映画祭 若手日本人監督海外プロモーション」

参加レポート

佐藤 快磨

長編2作目として準備してきたプロットをなかなか書き進めることができずに2年が経ち、現状を打破するきっかけを模索していたところ、本プロジェクトを知り、このたび参加させていただきました。前作『泣く子はいねぇが』で釜山国際映画祭の併設企画マーケットである「Asian Project Market (APM)」に参加したことがあったので、ピッチ自体がどういったものであるかのイメージはついていましたが、資料作りから企画説明に至るまでのほとんどをプロデューサーに頼りきっていたため、今回は改めてピッチというものを一から学びたいという思いで臨みました。

マーケット参加前に実施していただいた二度の事前研修では、講師のロナンさんから企画資料とピッチそれぞれに対する具体的なフィードバックをいただき、出発前に自身の企画を整理する時間を用意していただけたことがとても大きかったように思います。物語の背景、ストーリー、キャラクター説明、作品テーマをどのように端的に繋げたらよいか、それぞれの企画に合わせた細やかなご助言のおかげで、資料とピッチはかなりブラッシュアップされました。私の企画は日本特有の業界を描くバックステージものでしたが、それがひいては日本社会の現状と重なっている必要があるのではという新たな視点もくださり、大変有り難かったです。

ベルリンに行ってからより意識するようになった点は、企画資料とピッチの相関性です。ピッチができる持ち時間はひとり約10分でしたが、英語が話せず、通訳する時間を要してしまう私が話せる時間はせいぜい5分程度でした。その限られた時間から逆算し、より効率的に使うための準備をもっとすべきだったと反省しています。企画内容に関するビジュアルをもっと資料に盛り込んだり、興味を引く小道具を持参したり、視覚的な工夫を用いることでピッチをする時間を捻出できたように感じました。そもそも英語を話せたら、と日々痛感し、今後は英語の勉強もこつこつと続けられたらと思います。

5日間にわたって海外映画祭のプログラマーや、セールスエージェントの方々にピッチをさせていただきましたが、みなさん共通していたように思うのは、観たことのない世界を表現する監督の強いビジョンやメッセージ、他作品にはない独自性を求めているということです。同時に広く深く届く普遍性も求められ、そのふたつがストーリーテリングの上でうまく調和している作品を作っていかなければと思いを新たにしました。注意しなければならないのは、国内と海外では独自性と普遍性にズレが生じるという点です。日本ではオリジナリティがあっても海外ではそうでなかったり、普遍的だと信じていたことが全く理解されなかったりと、標準を日本国内に合わせて考えるのではなく、常に海外からの視点を意識することが重要だと感じました。

しかしながら、私が意識する海外からの視点というのは想像の域を出ないものなので、自身の企画がどう海外に響くのかを実際確認するためにも、映画祭のプロジェクトマーケットを活用して多くのフィードバックをいただいたり、国際共同制作によって企画を揉んでもらうことで、作品に強度を与えられるのだと感じました。また、今回ピッチを行う様々な機会をいただきましたが、多角的な声を聞くということは、自身がどんな感想に共鳴しているのか、もしくは反発しているのか、自身の内側の声を聞く場でもあったのだと思います。なぜ自分がそのような反応をしていたのかを紐解いていくことで、どんな作品にしたいと思っているのか、何を面白いと捉えているのか、どんなビジョンを描いているのかなど、新たな独自性を見つけることに繋がっていくような気がしています。

私の企画は日本国内だけで完結する物語だったので、国際共同制作は無理だろうと半ば諦めていましたが、ピッチによってプロデューサーに強い関心を寄せてもらうことができれば、そのような作品であってもポストプロを海外で行うなどの道があることを教えていただきました。どちらかと言えば撮影よりも、脚本開発や編集などのクリエイティブを監督と共にしたいというプロデューサーが多かった印象です。「MAに2週間はかける、日本はポストプロ費が圧倒的に安い」というお話も伺い、日本映画の予算の低さを指摘されていました。私は自主映画を撮っていたので、商業作品の撮影において「こんなに予算があるのだから贅沢は言えない」と思いこんでしまっていたのですが、MAの日数などは正直もう少しほしいと感じることがありました。もちろん、制限の中での工夫からより良いクリエイティブが生まれることはあると思います。ただそういった緊縮状態の中でアイデアを考え続けることに慣れてしまっているのだろうかとか強く危機感を抱きました。

最後に私事として、前作『泣く子はいねぇが』は2020年のサンセバスティアン国際映画祭コンペ部門で最優秀撮影賞をいただいたのですが、コロナ禍で映画祭に参加できなかったことが非常に心残りでした。今回『泣く子はいねぇが』を観たという方々にお会いすることができ、2年越しに直接感想をいただけたことが大変嬉しかったです。次作も楽しみにしているとお声がけいただき、今後の励みとなりました。国境を越えて映画や映画作りで人が繋がりを持てることを経験させていただきました。

今回お世話になった皆さまに心より感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

